

# 豊明希望チャペル礼拝

2026/9/6

「信仰にとどまること」

使徒の働き 14 : 19～28

先週は、杉本先生をお迎えし、ちょうど今、私たちが教えられているパウロの伝道旅行に触れて、教えていただきました。先生は、パウロの**第二回目の伝道旅行**(15:36～18:22)に触れていただきました。



「16:6 それから彼らは、アジアでみことばを語ることが聖霊によって禁じられたので、フリュギア・ガラテヤの地方を通って行った。・ 16:7 こうしてミシアの近くまで来たとき、ビティニアに進もうとしたが、イエスの御霊がそれを許されなかった。16:8 それでミシアを通して、トロアスに下った。」

パウロが、聖霊に禁じられて(サタンではなく)、ビティニアに行かず、トロアスに下った事から、一見、マイナスと思えるような歩みに見えるときがあっても、主には見えない計画があること(紫布の商人の救いなど)、私たちは、すぐには理解出来ずとも、神さまを、そして、御言葉を信じて、困難を超えた前に進まねばならないことを教えられたのではないのでしょうか。

今、私たちが教えられているのは、そのパウロの、**第一回目の伝道旅行**(13:1～14:28)の記録であります。私は、前回、杉本先生から第二回目が一見うまくいかなかった旅行であったが、第一回目も、うまくいかなかったなあ・と、ああ、なるほど、それでも、神さまには、私たちの想像を超えて、計画があるのだなあ、と、あらため

てふり返りながら聞いていたことでありました。さて、前回の 14:18 までのところを、簡単にふり返ると、こうなります。

シリアの**アンテオケ**(アンティオキア)**教会**→**キプロス島のサラミス&パポス**：**パフォス**→**パンフィリア**(:パンフリア)の**ペルゲ&ピシディアのアンティオキア**(ユダヤ教会堂での説教で町中の人々が集まる)→**イコニオン**(イコニウム：大勢の人が信じる)→**リステラ**(ルステラ：足の不自由な人のいやしもあって、パウロらギリシャの神々に例えられるほどの盛り上がり)

と、キプロス島での有力者のおそらく信仰の目覚めから始まり、アンティオキアでの本格的な宣教での町中の人々の救い、そして、リステラでは、ギリシャの神々に例えられるほどの盛り上がり、その宣教は火がついたように広がり、そのついた火(聖霊と、御言葉の働き)は、ついには大火事になるほどに、多くの人が神の言葉に感動して、キリストを信じ、御言葉を信じたのでありました。

二回目の宣教が、一回目も同じだったなあと私が言いましたのは、たとえば、一回目のアンティオキアでのユダヤ教の会堂で、大きな反響があったにもかかわらず、ねたみに燃えたユダヤ人にののしられ、そこを去らねばなりませんでした、そのことが、かえって、異邦人伝道への最初のきっかけとなったという、神さまの見えない計画があったのだなあと思うからであります。

「13:46 そこで、パウロとバルナバは大胆に語った。「神のことは、まずあなたがたに語られなければなりません。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者にしています。ですから、見なさい、私たちはこれから異邦人たちの方に向かいます。13:47 **主が私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを異邦人の光とし、地の果てにまで救いをもたらす者とする。』**」とある通りです。

そして、その結果での、異邦人が、ユダヤ人以上に盛り上がり、信じて、パウロらを神に持ち上げるほどの、ある意味では、伝道の成果、また御言葉の働きの素晴らしさを経験することになったと言うことであります。さて、それが、前回のところまでの話しでした。今日の箇所でも、こうした、神の働き、聖霊の力、御言葉の力は、人間の思惑(おもわく)も、想像も超えて、はるかに大きな働きとなって実を結んでいくのであります。

今日のところは、その大きな反響、大反響の結果が語られます。地図で言うと、リステラでの出来事です、それは、ある意味でこれまでと同じように、私たちの望まない、むしろマイナスと思えるような出来事でした。たしかに、宣教の大きな実は、そのパウロへの報酬は、一見、良いものではなく、むしろ、これまで通り、大きな苦しみ、大きな迫害となって、パウロらの身に降りかかってまいったのであります。

「14:19 **ところが、アンティオキアとイコニオンからユダヤ人たちがやって来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにした。彼らはパウロが死んだものと思って、町の外に引きずり出した。**」

反響の大きさに比べて、反発の大きさ、迫害の大きさも、段々と増してまいりました。アンティオキアでの、「口汚いののしり」(13:45)は、イコニオンでの、石打のころみとなり(14:5)、今回のリステラでは、その石打の試みが実際に、パウロの身に降りかかったという話であります。

この書の著者ルカは、その出来事を、淡々と、しかしだからこそ、そこにパウロの凄みを感じるのですが・・・そのまま記録します。

「14:20 しかし、弟子たちがパウロを囲んでいると、彼は立ち上がって町に入って行った。そして翌日、バルナバとともにデルベに向かった。」



デルベは、リステラから、100キロほど西のところになりますが、その後、不思議なことに、もう一度東に引き返します。そして、その地は、ユダヤ人たちが、パウロらを殺すつもりできた、アンティオキアとイコニオンに向かったというのです。見て下さい。ビックリします。

「14:21 二人はこの町で福音を宣べ伝え、多くの人々を弟子としてから、リステラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返して、」

先程来見てきた、パウロらが最初の異邦人宣教地となった地です。そして、ここで命をねらわれて、その危険から、いわば、一旦、避難したわけですが、その地、「アンティオキアとイコニオンからユダヤ人たちがやって来た」、その、言わば敵のふところに引き返し、飛び込んで行った、まるで、復讐でも？するかのように、乗り込んでいった？のです。

どういことでしょうか。何をしに言ったのかが、すぐに書かれます。

「14:21 二人はこの町で福音を宣べ伝え、多くの人々を弟子としてから、リステラ、イコニオン、アンティオキアへと引き返して、

14:22 弟子たちの心を強め、信仰にしっかりとどまるように勧めて、「私たちは、神の国に入るために、多くの苦しみを経なければならない」と語った。」

引き返した目的は、救われたばかりの異邦人たちを励ますためでした。書いてある通り、気持ちを強く持つこと、信仰を捨てないこと、信仰者は、神の国、天国に行くまでには、迫害をはじめとする、様々な苦しみや悲しみを、通るのが当然であって、驚いてはならないこと、そういう困難があっても、信仰から離れないで、天国の目標を見失ってはならないことを、確認し、確信させるために、引き返したというのです。

・・・思うのは、どうでしょうか？パウロってすごいなあということですし、自分が殺されかかったのに、敵のふところに入ってまでも、自分のことよりも、誰のことを、命がけで考えていたということでしょうか。そうです、クリスチャンの仲間、救われたばかりの人たちのことをです。

パウロは、自分の命まで危険にさらされるということは、神を信じた信仰者達も同じように、命の危険にさらされている、私を殺した、殺しかけたユダヤ人たちが、戻った、急げ！彼らが危ない！彼らユダヤ人たちから、信仰者達を守らなければならない。そう考えたのです。パウロは、今後、彼らを守るための方策を考えながら、向かったのでしょう。パウロは、彼らにこう伝え、こういう配慮をします。

**「14:23 また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食して祈った後、彼らをその信じている主にゆだねた。」**二つのことをしました。

**(1)教会ごとにリーダー(長老：牧師)をおくこと。**

**(2)主にゆだねる。**ということです。

まず、私たちが忘れてはならないのは、自分で全部やるのではないということです。小さな教会でも、組織があつて、役員や牧師が選ばれて、協力して、そして励まし合って迫害に対処するということです。私たちの信仰は、兄弟姉妹と牧師と祈り合ってこそ、保たれ、強められるのだということを、謙遜に認め、互いに祈りあい、励まし合い、支え合うことを大切にしたいと思います。

しかし、それだけではありません。パウロは、自分では彼らを守り切れないこと、励ましきれないことをよく知っていました。しかし、それは、パウロの欠点にはなりません。足りなさにはなりません。なぜなら、私たちは、ゆだねる方がおられるからです。神さまであり、イエス様であり、聖霊であります。

パウロは、彼らと肩をたたき合って、励まし、組織を健全にすれば、終わりと思っていませんでした。共に神にゆだねる事、神に信頼すること、その確認、その確信さえあれば大丈夫と思っていたということです。

パウロらは、主にゆだねたなら、それ以上はとどまらず、すぐに新しい宣教の地へと向かいます。ピシディア地方から、南のパンフリア地方へと向かいます。最後まで読みます。

**「14:24 二人はピシディアを通してパンフィリアに着き、14:25 (最初のアジア上陸地)ペルゲでみことばを語ってからアタリアに下り、14:26 そこから船出して(シリアの)アンティオキア(アンティオキア教会)に帰った。そこは、二人が今回成し終えた働きのために、神の恵みにゆだねられて送り出された所であった。14:27 そこに着くと、彼らは教会の人々を集め、神が自分たちとともに行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。14:28 そして二人は、しばらくの間、弟子たちとともに過ごした。」**

大事な、そして、パウロにとっても驚くべき報告の中心は、「**神が自分たちとともに行われたすべてのことと**」(逆境に思われる程に、聖霊が働いて、助け、宣教を拡大させていただいた事)と、「**異邦人に信仰の門を開いてくださったこと**」でした。



さて、これが、第一回伝道旅行の結末(報告)でありました。

くすしくも(神さまに導かれて)、杉本先生から、第二回目の伝道旅行の中心点、ポイントを伺い、引き続いて、今週も、使徒の働きから教えられて、どんな感想を、皆さんは持たれたのでしょうか。

私たちは、パウロのたくましさや、力強さ、逆境に負けない、伝道者、あるいは、信仰者の姿を見たのでしょうか。たしかにそれも、見ました。私たちも、パウロになりたいものです。しかし、それは、教えられるべき中心ではないだろうと、思います。パウロもそう思っていると思います。

教えられるべきは、最初に確認したように、**私たちの計画や、思い、一見、苦しいと思われる、悲しいと思われることで通じて、神さまの計画は、力強く進むということであり、とりわけ、御言葉に信頼して歩む人には、御言葉そのものの力が、及んで、その人を導く**と言うことであります。

**人ではなく、神さま。人は弱くても、神さまは強い、だから、神さまに私たちは、もっとゆだねていい、信頼していい、安心して、シャローム(平安)と賛美しながら、歩んでいい、歩むべきだ**と教えられたのではないのでしょうか。

今回は、先週と今週と二回にわたって、そのことを同じ使徒の働き、同じ、パウロの伝道旅行の記録を通して、教えられました。そして、そのことは、別の牧師の口を通して、神さまが、私たちに、このことをより強く印象付けようと語ってくださっているようにも感じるのです。今一度確認して終わりたいのです。

**「私たちの計画や、思い、一見、苦しいと思われる、悲しいと思われることで通じて、神さまの計画は、力強く進むということであり、とりわけ、御言葉に信頼して歩む人には、御言葉そのものの力が、及んで、その人を導く。**

**人ではなく、神さま。人は弱くても、神さまは強い、だから、神さまに私たちは、もっとゆだねていい、信頼していい、安心して、シャローム(平安)と賛美しながら、歩んでいい、歩むべきだ」と。**

今週の歩み。

サタンの方略に逃げるのでもなく、私の信仰の小ささのいいわけでもなく、いつも最善を用意し、行ったださる(by 杉本師)、圧倒的な神さまに、イエス様に、御霊に信頼しつつ歩む、この週でありたいと願います。